広報 九州
国民の森林・国有林
令和3年11月10日
（2021年）
No.1797
九州森林管理局
〒860-0081
熊本市西区京町本丁2－7
IP電話：050-3160-6600（代表）
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/

採材検討会を開催

～小さいことを積み重ねる～

【西都児湯森林管理署】

10月14日に当署都農森林事務所管内の尾鈴（川北）国有林において、システム販売材で一定量発生する規格外（用材として生産するが一般材の規格に合わないチップ利用等の材）の縮減を図り、生産性向上につなげることを目的として、採材検討会を開催しました。

採材検討会には当署職員（監督員含）、川上の生産請負事業体（採材担当者）、川中の委託販売市場、川下のシステム販売協定者から34名の参加があり、関係者が採材について共通の認識を持つことにポイントを絞って実施しました。

冒頭、鶴山道弘署長からウッドショックの影響を踏まえた材価の現状、効果的な採材の重要性等についての挨拶を行い、その後、塩谷幸子森林情報管理官から採材検討会で解決したい課題等を交え説明を行いました。説明のポイントとして「規格外は儲けの取りこぼしであること、発注者・受注者・需要者それぞれ損していること、規格外は生産者と需要者のすれ違いで発生していること」等について、昨年度の現場別生産量の分析結果を示したグラフを利用して説明するなど、システム販売の採材基準等について改めて参加者の認識を統一することができました。

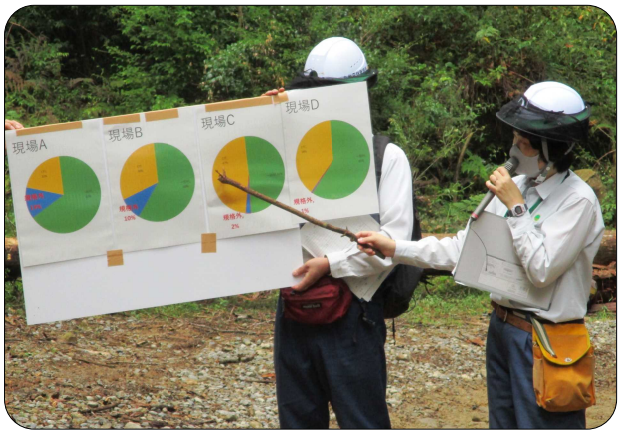
また、説明の中では、採材技術は職人技であることについて、野球界の職人・イチロー選手の名言である「小さいことを重ねることが　とんでもないところへ行く　ただ一つの道」を引用するなど、ユーモアも交えながら熱の入った担当者の説明に参加者も聞き入っていました。

検討会では参加者を4班に分け、全幹材のスギ・ヒノキ各3本を班ごとに実際に採材してもらい、あらかじめ署で行った採材結果と比較し班ごとの違いや採材のポイント等について、草野正揮総括森林整備官から説明しました。中には、採材方法について意見が分かれるケースがあり、実際に玉切りを行い丸太の状態で材種区分等を検証するなど、参加者の採材に当たっての認識のズレを修正することができました。

最後に、需要者から意見や要望、直近の市況動向も交えて意見交換を行いました。参加者からは、「規格外を減らすことを強調し過ぎれば、規格外とならないようC材にしてしまうことが危惧される」などの指摘もあり、規格外を減らしつつ一般材の生産量をいかに上げるかが重要であることを再確認するなど有意義な検討会となりました。

採材検討会に参加された皆さん

採材検討会の様子



説明の様子

今回実施した採材検討会は、当初春先の開催予定でしたがコロナ禍や天候不順等による延期を経て、ようやく開催することができました。会を開催して、採材基準の判断について関係者と目合わせができ、署としても生産者に「なぜ規格外になっているのか」をフィードバックする良い流れを作る機会となりました。

また、出席された生産者の皆さんが、今回の検討会の内容をそれぞれの職場に持ち帰り職場内で共有していただくことで、今後さらなる有利採材と採材技能者の育成に繋がるものと期待しています。

当署では今後においても生産者と需要者のすれ違いが少なくなり、生産性向上に繋がるよう引き続き取り組んで行きたいと思います。

令和3年度第2回国有林材供給調整検討委員会を開催

9月28日に、本年度第2回目の「国有林材供給調整検討委員会」を開きました。

各委員がそれぞれの専門分野からの意見を述べあい、「素材生産の早期発注及び立木販売の計画的早期販売などの国有林の取組を継続しつつ、民有林の出材状況、原木価格の動向、工場等の原木仕入れ状況、木材製品価格の動向などの状況を踏まえ、機動的な供給調整を実施できる体制を維持すべきである。」との検討結果となりました。

各委員からの主な意見は次のとおりです。

○合板業界の生産量は今年の7月においては27万7千m3であり、2019年の年間平均生産量27万5千m3と比較して差はないが、合板への需要は旺盛で国産材原材料があればもっと生産できており28万m3を超えていたと思われる。

挨拶される小島局長

国産材の供給は5・6月は非常に逼迫していたが先ほど事務局からもあったように国有林の前倒し販売などが功を奏したのか徐々に回復傾向にあるが不足感はある。

また、ヒノキの原料が足りないていないところに、ヒノキの伐採後にスギを植えられておりヒノキの植林がされていない。獣害も多いということで私たち合板で使うヒノキが10年後には無くなるのではと危惧している。

挨拶される遠藤委員長

供給については私たちは使う側なのでふんだんにいただきたいと思っている。

○チップ工場の現状として、いくつかの発電所が操業開始の見込みと聞いてお

り燃料用原木においては安定的に需要があるが、原木の集荷の点ではウッドショックで素材単価が高騰しているということで輸出材、また市場への出材が増えてチップ工場への入荷が減ってきている。

山林事業においては立木公売が行われる中で業者間では確保できているが手持ち在庫という点では増えていない模様。また、各現場とも奥山化してきており場所が悪くなってきている。出材効率のよい場所を探しているが、要望として国有林からの立木販売も出材効率の良い場所を提供してもらいたい。

現在のような高い価格で落ち着いてもらえば山を伐る側とすればありがたい。この流れを切らさないような形でやっていければと思うので今後も供給を継続してもらいたい。

○メーカーの在庫というのは近年まれに見るほど減っており流通在庫となっている。この秋需で流通在庫はあっという間になくなってくるのではないかと懸念される。製材工場の受注は多いが原木不足というより人手不足、残業等の問題で増産がしづらい状況にある。しかしこれは悪いことばかりではなく、需給バランスがそのおかげで引き締まっているという現象が起こっている。

急激に高騰した価格等が急激に下がるのは危惧されることだが、多少下がってきても何とかソフトランディングさせるということを努力していかなければならない。

国有林にお願いしたいことは切れ目ない出材のため早め早めの計画で発注を行い、事務手続きなどある中でも現場が滞りなく出材できるような仕組み作りをお願いしたい。

○原木価格は4～5月で急激に上がり恐らく全国で一番に宮崎県都城で2万円を付け、それから千円ほど下がったが現在はまた戻り大体2万円で推移している。

製品ではグリーン材についてはだぶつき値崩れが起きている。KD材においてはほとんど横ばいであり、柱、構造材、土台には強い物がある。

製品の受注は順調で輸入材も増えておらず、価格も落ちていないので来年の3月頃まではこの調子でいくのではと思っている。

今一番大事なのは国産材の代替需要といわれているが、もともと40年前位までは国産材だけであった。代替ではなく奪還をしていかなければならない。うれしいことに首都圏、関西圏の中大手のハウスメーカー、設計会社が国産材化に取り組んでいきたいと相談があり実際納材もしてきている。

国有林には安定供給で生産体制のサポートをお願いしたい。

○弊社では安定供給システム販売が9割を占めており価格の改定はほぼ無かったが今年においては5～8月において月に一度価格の見直しを余儀なくされるという形になった。ウッドショックを機に新たな国産材需要の開拓に向けたシステム販売を構築していきたいと思っている。

5～8月は例年では取扱量が落ち込むところを今年は大きく上回る事ができたが9月に入ってかなり落ち込んでおり目標に対して7～8割になる見込み。九州北部では林道の被害が大きく復旧まで若干かかるとの見通しがあり、また今になって虫の被害も見受けられるようになってきた。

検討委員会の様子

供給調整については安定供給に国有林の協力が必要となり調整の必要は無い。

○4～7月にかけて数十年ぶりに仕入れ・販売価格等ありがたい状況が続いている。

特に東北を中心として関東・関西・東海・四国方面で丸太が足りていない様子。潤沢に出ているのは九州だけと聞いており、九州外に流れている影響で内航船の引き合いが強くなっている。

今のような状況で仕事をさせてもらうのは非常にありがたいが、山を伐るということへのリスクというものを当然考えなければいかず、木材の高騰と言われているが、山を伐ったら植えてせめて数年は育てていくという再生整備計画をたてて山の売買をやらないといけない。また、民間の山林も集約をするなかで安定的に出材をしていく仕組みを作ればコストを下げていけると思う。しかし、役場や森林組合にも詳しい人間がいない。そういうところから解決しなければ安定供給というのは難しい。

○今年の4～6月、7月上旬まで価格の価格の急騰

というのは初めて経験した。おかげで、これまでにない山主への還元が出来ている。

入荷量について、価格の影響もあって今年9月で昨年の2．5倍となっている。事業体からの入荷も、昨年に比べ2．1倍となっている。これまで直送で持って行ってたものが価格がいいので市場に集まるようになっている。とにかく価格が高く、山で仕分ける手間がかからない市場へ持って行けと言っている素材生産業者もいる。

輸出用の低質材を高く買われる方は1万2千円で買って輸出へ持っていっている。鹿児島県内にもバイオマス発電所並びにチップ工場もたくさんあるが、低質材を輸出向けで買って中国向けに輸出されているものだから、地元チップ材が入ってこず手当できない状況もある。

民有林材の値段がいいので市場に集まってきているので、価格を維持していく上でも、国有林の出荷調整については市況を注視していただきながら、今後も継続してほしいと考えている。

＊本検討委員会の詳細は、九州森林管理局HPのキーワードの木材の供給情報の「九州森林管理局国有林材供給調整検討委員会の検討結果等について」からご覧になれます。

（担当＝地域木材情報分析官）

『世界自然遺産登録記念式典』が開催される

10月23日、鹿児島県主催による世界自然遺産登録記念式典が鹿児島県奄美大島において盛大に開催されました。

記念式典には、塩田鹿児島県知事はじめ地元市町村長、尾辻参議院議員、県議会議長の方など行政機関関係者等約70名程度が参加しました。来賓挨拶では、環境省奥田自然環境局長の後、天羽隆林野庁長官の代理として小島孝文九州森林管理局長から、「本局の自然遺産地域に係るこれまでの取組については、地域の皆様方のご理解ご協力に敬意を伝えられるとともに、今後の遺産登録地においても適切な保護・管理に努めていきたい。」との挨拶のあと、林野庁長官からの祝辞を代読されました。

記念式典に参加された関係者の皆さん

祝辞を代読される小島局長

その後には、世界遺産認定証授与（レプリカ）が環境省奥田局長から授与され、最後には、地元小学校2校から生態系保全への取組事例について発表があり、後世に健全な状態で引き継いでいくことが確認されたものとなりました。

式典の最後には、記念式典横断幕のもと関係行政機関等の方々が全員参加され、記念撮影が行われ記念行事が終了しました。

（担当＝計画課）

令和3年度「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」世界自然遺産科学委員会、地域連絡会議について

令和3年度第1回目の世界遺産科学委員会が9月22日に、オンライン形式において開催されました。

冒頭、環境省の堀上自然環境計画課長による挨拶の後、当局の山根則彦計画保全部長から「これまで世界自然遺産の登録に向け貴重な助言等をいただいたことにお礼申し上げるとともに、地元関係者や関係機関との連携、希少種等の保護のための巡視や入林状況の把握など、引き続き皆様方と連携・協力し、人類共通の財産として後世に健全な状態で引き継いでいけるよう保護管理に努めて参りたい」と挨拶されました。

挨拶される山根計画保全部長

今回の会議では、遺産候補地から遺産地域への変更点を説明し、①登録決議時の要請事項②モニタリング計画に基づくモニタリング結果等について、現状の説明及び課題等の報告が行われました。

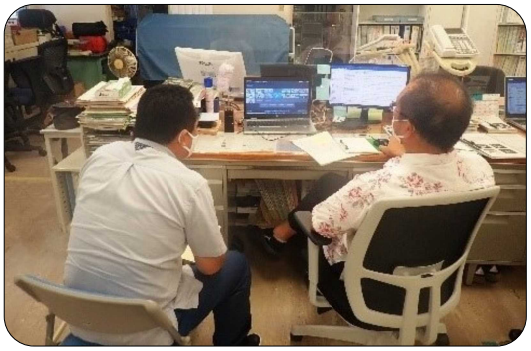
委員からは、要請事項への確認及び助言、モニタリング結果等については、評

価シートのあり方及びノネコに関する事項や外来種対策等について幅広く意見がありました。

当局では、今後とも事務局の一員として各機関と連携しながら、当遺産地域の貴重な自然環境を適正に保全・管理していくこととしています。

また、科学委員会に先立ち、8月30日には、地元市町村長及び関係行政機関が出席し、第1回目の地域連絡会議が開催されました。今回は、要請事項4項目に係る今後の対策及びスケジュールについて説明を行い、参加された地元市町村からの要望など取り纏めを行いながら、各タスクフォースで検討することとしています。

（担当＝計画課）



西表保全Cからもオンラインで参加

令和3年度大分県農林水産祭「おおいた みのりフェスタ」林業部門へ参加

【大分森林管理署】

10月16日、17日の2日間にかけて、令和3年度 大分県農林水産祭「おおいた みのりフェスタ」が、別府市の別府公園において開催されました。今年はコロナ禍で農林部門と水産部門の初の合同実施となり、全129団体が集まりました。

大分森林管理署からは、参加者が木の温もりにふれる中で、森林の役割や国有林の取り組みなどに、興味や関心を持ってもらうことを目的として、森林・林業・木材産業に係るパネル展示、丸太切り体験やジェットシューター体験などのコーナーを設けました。

丸太切り体験では、初体験の子供たちが、職員に鋸の使い方や丸太切りのコツを習い、強い日差しの中でも、お父さんやお母さんと一緒に汗を流しながら挑戦していた姿がとても印象的でした。

パネル展示の様子

職員の教えも切るお子さんも上手

ジェットシューター体験は、職員がジェットシューターの用途を説明した後、参加者が的めがけて水を放射し的を倒すというもので、初めての試みでしたが、ゲーム感覚で大人から子どもまで幅広い年代が楽しんでいました。

その他にも、森林施業、森林環境教育やCLTなどに関するパネル展示及び、有害鳥獣対策やレクリエーションの森に係る冊子を来場者へ配布し、国有林の取り組み等に理解をもとめました。

ジェットシューター体験の様子

コミュニティFMで眉山の治山をPR

【長崎森林管理署】

10月22日（金）、島原市のコミュニティFM局において、「もっと！防災のおはなし」というラジオ番組内で眉山の治山事業を題材に収録を行いました。

この番組は、「雲仙砂防管理センター」と「FMしまばら」のコラボ企画であり、毎回島原半島で活躍する防災担当者をゲストに、各機関の防災に対する取組や告知などを取り上げ、様々な災害に対応するために奮闘する姿を広く知っていただくことを目的としたものです。

番組では、FMしまばらのラジオパーソナリティ、雲仙砂防管理センター職員と3名による対話形式にて収録が行われ、眉山治山事業所の渕上翔吾治山技術官が眉山の歴史や着手から100有余年の歴史を持つ治山事業を紹介するとともに、治山事業の内容として、へ

リによる種子散布や治山施設の内容さらには山体を観測している観測システムについて紹介するなど分かり易い説明を行いました。

番組は、11月の1ヶ月間20分番組として毎週月曜日に繰り返し放送されます。

長崎森林管理署では今後もあらゆる機会を捉え、島原市民の安全・安心のために治山事業が果たしている役割についてPRに務めて参ります。

【佐賀森林管理署】

収録中の渕上治山技術官（右側）

秋空の下　虹の松原クリーン大作戦！

10月17日、虹の松原（唐津市）において、秋空の下、NPO法人唐津環境防災推進機構KANNE主催による「虹の松原クリーン大作戦」が実施されました。当日は、唐津市経済観光部、唐津南高校、唐津西高校、唐津市内の中学校、関係機関、協力企業・団体、一般ボランティア等、約300人が参加しました。佐賀森林管理署からは、植薄和彦地域林政調整官、志戸祐二森林官（家族で参加）が参加して汗を流しました。

現地に到着後、受け付けを済ませて早速作業に入り、はじめに地表の落枝と松ぼっくりを拾い集め、その後、松葉かきを行いました。

松葉かきの様子

参加者によって集められた落枝

作業の途中には、KANNE　藤田事務局長から「虹の松原はおよそ400年前に唐津藩初代藩主が潮害、飛砂から田畑や家を守るために砂丘に、クロマツの植栽を命じたのが始まりです。そして今日まで受け継がれてきました。このような、作業を通じてこれから先も虹の松原を大切に守っていきましょう。」と虹の松原の歴史とボランティア作業を企画した思いを紹介されました。

今回の作業は、浜崎森林浴の森公園付近の約1ヘクタールで実施され、作業開始直後は、肌寒い気候でしたが、後には額に汗したボランティアの方が多く見られました。そして、参加者の手によって白い砂が蘇り作業の成果が見えてきました。

本年6月に続いて2回目のクリーン大作戦に参加し、虹の松原が地元唐津市民をはじめ多くの方々の支えによって維持されていることを目にし、当署としても、関係機関、団体などと連携して、今後も「虹の松原再生・保全」に取り組んで参ります。

令和3年度ミヤマキリシマ周辺刈出作業及び自然公園クリーン活動を実施

【大分西部森林管理署】

当署では毎年、ミヤマキリシマの生息環境を改善するための刈出作業と、くじゅう連山におけるクリーン活動を実施しています。

そこで、10月14日、大分県九重町の牧ノ戸峠周辺の国有林において、当署職員二名とグリーンサポートスタッフ4名が参加して、「令和3年度ミヤマキリシマ周辺刈出作業及び自然公園クリーン活動」を行いました。

まず、ミヤマキリシマ周辺刈出作業では、日田仁志森林技術指導官から作業手順の説明を受けた後、初めて刈り出し作業を行う職員も多数いる中、全員が草刈鎌を持ち、ミヤマキリシマ周辺の灌木の刈り払いを行いました。

ミヤマキリシマは、九州の標高約1000メートル以上の山地に生息するツツジの一種で、国の天然記念物に指定されているほか、九重町の「町の花」にも指定されています。毎年5月

ミヤマキリシマ刈出作業の様子

から6月にかけて見頃を迎えると、山一面がピンク色に染まり多くの登山客で賑わいます。

刈出作業終了後、二班に分かれ、牧ノ戸峠駐車場を出発し、扇ヶ鼻コースと黒岩山コースのクリーン活動を実施しました。当日は、好天に恵まれ登山者も多く見られましたが、近年の登山マナーの向上もあって、ゴミは殆どありませんでした。

当署では引き続き、豊かな自然に恵まれたくじゅう連山の国有林の保全に向けて、クリーン活動や、ミヤマキリシマの刈出作業等の活動を展開していくこととしています。

クリーン活動の様子

「連合の森」の森林整備を実施

【熊本森林管理署】

10月24日、当署管内の阿蘇深葉国有林内の分収造林契約地「連合の森」において、連合熊本菊池阿蘇地域協議会主催による列島クリーンキャンペーンの自然環境保全活動の一環として「連合の森」の森林整備作業が、当署職員11名を含む約40名が参加して開催されました。

開会式では、川畑充郎署長から「長年にわたり森林整備作業等を続けていることに敬意を表するとともに、このすばらしい森林が次世代に繋がるように継続した活動を期待します」との挨拶に続いて、下大迫伸一総括森林整備官から作業上の注意事項等について指導しました。

当日は、秋晴れの中で「連合の森」内の歩道補修作業を行い、当署職員の指導のもと既設歩道の階段部分の丸太交換を行い心地よい汗を流し、作業終了後は大きく育った分収造林地の森林内を散策する参加者もいました。

コロナ禍の中であり、昨年度に続いて森林教室は実施できませんでしたが、当署としては、引き続き関係機関等と連携して国民参加の森林づくりと森林環境教育活動を積極的に推進していく考えです。

参加者でハイチーズ

歩道補修作業の様子

市林務担当職員を対象とした森林整備事業箇所等の現地見学会を開催

【宮崎南部森林管理署】

10月1日に日南市と串間市の林務担当職員を対象とした森林整備事業箇所等の現地見学会を開催しました。この見学会は、両市と実施した林政に関する意見交換会において要望があったもので、日南市4名、串間市2名、当署のサポートチーム7名が参加しました。

見学会では、福嶋貢史署長から「林政の推進に当たっては、民国連携した取組が必要であり、国有林として民有林への支援や地域林政の課題解決に向け国有林のフィールドを活用しながら取り組んでいきたい」と挨拶があった後、当署の国有林で現在実行中の下刈箇所、特定母樹等の中苗植栽による造林コスト省力化試験地、立木販売箇所、保育間伐（活用型）箇所の順で見学し、当署の各担当者から事業の概要、作業仕様等について説明を行いました。参加した林政担当職員は林政の実務経験が浅いことから、特に活用型の現場では、伐倒から集材、造材、搬出、椪積みまでの一連作

下刈試験地での様子

業を見学した際には、伐倒時の迫力やプロセッサによる揃った採材に関心を持たれていたようでした。また、下刈作業は暑い昼間を避けるため早朝から実施しているのか、緊急時の連絡体制や作業人員、苗木の生長量の違い、搬出路の作設方法等の質問や実際の作業現場を見られて勉強になった、次も計画して欲しいとの意見がありました。

今後の予定として、皆伐の収穫調査の勉強会を実施することとしました。当署は引き続き、サポートチームを中心に地元の意見を聞きながら、民有林支援に取り組んでいく考えです。

活用型の現場での様子

令和3年度みやざき林業大学校（長期課程）研修

【宮崎北部森林管理署】

10月5日、東臼杵郡美郷町にある宮崎県林業技術センターに於いて「令和3年度みやざき林業大学校」の研修に、古島勝美署長並びに宮崎太守森林技術指導官が講師を務めました。

この研修は、宮崎県が平成31年度に将来の林業経営を担う有望な人材を育成するために開校され、毎年度20名程度の研修生を受け入れ1年間にわたり、座学、資格取得、実習を経て、林業に関する様々な就職先で活躍されています。

今回、研修講義として、まず、古島勝美署長から昭和初期等の古い写真を使用し、斧や鋸での伐倒、架線集材、軌道運材、貯木場での丸太販売、種苗、植付、下刈等の当時の作業について説明がなされました。続いて、宮崎太守森林技術指導官より国有林における林業（施業方針や施業状況）及び林業労働災害防止のための安全管理について、合計3時間の時間をいただき講義を行いました。

研修生は18歳から20代がほとんどで（最年長52歳）、講義内容に対しての反応は様々でしたが、多少なりと国有林野の取り組みや森林管理署の業務内容を知ってもらえたのではと感じました。

古島署長の講義の様子

次世代を担うリーダーとなる人材育成を支援

【宮崎南部森林管理署】

10月6日～8日にかけて、みやざき林業大学校（長期課程）のサテライト研修「県南の林業」が昨年度に引き続き実施され、6日に当署の三ッ岩オビスギ遺伝資源希少個体群保護林と林分密度試験林の視察研修を行いました。

研修には、林業大学校研修生20名、研修指導員4名、職員2名のほか南那珂農林振興局から日高局長、松永次長、高島副主幹が参加されました。

三ッ岩オビスギ遺伝資源希少個体群保護林では、当署の森正文森林技術指導官から概要（沿革、現況）説明後、巨木の林内を散策しながら飫肥林業の歴史、飫肥杉の品種・特徴等を説明しました。

その後、林分密度試験林（通称：木のミステリーサークル）に移動し、設定目的・設定方法等の説明後、円形試験地の中心地まで歩き、中心上空の空間の様子、植栽密度による径級の違いや下層植生の繁茂状況の違い等を確認しました。研修生からは、三ツ岩保護林で定期的に成長調査を行っているが何に使うのか、林分密度試験林での結果を今の林業にどう活かしていくのかなどの質問がありました。

研修生は、今年の4月か

保護林での説明の様子

研修生の皆さん

ら1年間かけて林業の知識や技術を身につけ、将来の宮崎県の林業・木材産業をリードする人材になることが期待されています。当署は引き続き、民有林における人材育成を支援することは重要と考えており、今後も保護林や試験地等のフィールドを活用して積極的に研修等を受け入れる考えです。

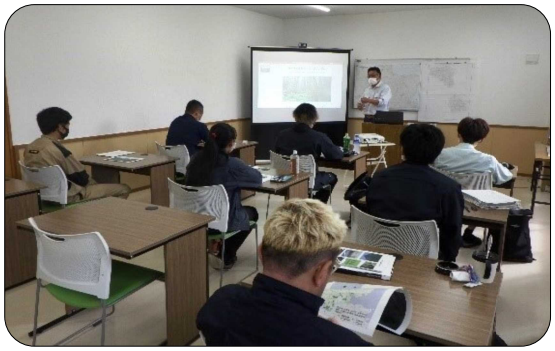
また、今回の研修には地元テレビ局や新聞社も取材に来られ、6日は地方のニュース番組、7日は全国版のニュース番組、14日は紙面で紹介されました。

「おおいた林業アカデミー」への職員派遣

【大分森林管理署】

10月11日、大分森林管理署は民国連携関連の事業として、大分県からの要請を受け、新規林業就労者を育成する「おおいた林業アカデミー」へ職員を派遣し、講義等を行いました。「おおいた林業アカデミー」は林業に就労を希望する新規の研修生を毎年募集し、林業に必要なチェーンソー技術等を1年かけて習得させる機関です。

午前中は、武原龍行森林技術指導官、武藤良助総括森林整備官、嶋徹矢主任森林整備官、廣田光春主任森林整備官が講義を受け持ち、大分森林管理署の紹介と林業の現状と課題について、森林計画と立木販売について、森林整備事業（活用型）について国有林の現在行っている事業を中心に講義を行いました。研修生からは、大分署が実施している大苗植栽のコストや生産性を上げるための方法等について質問がありました。



講義の様子

活用型の現地見学の様子

午後からは現在実行中の保育間伐活用型の請負事業箇所に移動し、ウインチでの集材作業及びハーベスタでの造材作業等を見学しました。研修生からは始業時間や作業配置のやり方など実際の作業の現状について多くの質問がありました。

インターンシップ（鹿屋農高）について

【大隅森林管理署】

大隅森林管理署では、毎年継続して鹿屋農業高校の2年生を対象に「職場体験」として受入れを行っています。

本年度は、10月27日（水）～10月29日（金）の3日間実施しており、受講者は3名を予定していましたが、コロナワクチン接種等と重なり、1名のみ参加となりました。

職場体験の具体的な内容については、国有林の概況説明から森林整備事業、生産事業、林道工事、治山工事の各種現場作業状況を各担当者が説明し、現場でどのような目的で作業を行っているかや現在の作業内容について説明を行いました。

収穫調査体験の様子

この他に植付け必要なコンテナ苗について、樹苗生産者に赴き実際にコンテナ苗の育苗過程の説明や特徴などの説明が行われました。さらに、森林官からは林尺により胸高直径の計測を行うなど収穫調査を実際におこないました。

また、ドローンにより空から見た森林の状況や治山・林道の施工箇所をモニターで観て概況を把握しました。

最終日には、年が近い若手職員と意見交換を行い、国有林野事業についてのディスカッションを行い、職場体験学習を終了した。

コンテナ苗の説明を受ける様子

菊池労基署との連絡協議会を開催

【熊本森林管理署】

10月20日、当署管内の阿蘇岳国有林で実行中の治山工事箇所において、当署、菊池労働基準監督署及び請負事業体関係者の29名が参加して、令和3年度の労働基準監督署との連絡協議会を開催しました。

協議会は、歌野邦美総括治山技術官の司会進行により、冒頭、川畑充郎署長が「当署では昨年度からゼロ災が継続していたが、今月に入り林道事業で災害が発生したことから、これ以上の災害連鎖を断ち切るように、各種安全対策に万全を期して頂きたい」との挨拶に続いて、和田弥己治山技術官から工事概要と受注者の大政建設株式会社現場代理人から作業状況、安全対策等の説明があり、その後安全パトロールを実施しました。

安全パトロール終了後、参加者全員でパトロールの結果について意見交換を行うとともに、菊池労働基準監督署担当官から斜面崩壊による労働災害の防止対策に関するガイドライン、安全帯が「墜落制止用器具」に変更となる政省令等の改正、職場における新型コロナウイルス感染症対策等について指導して頂きました。

最後に、参加者全員で志賀栄一次長のかけ声に合わせてタッチアンドコール「ゼロ災で行こう、ヨシ！」を行い、年度末までこれ以上の災害は絶対に出さない、出させないことを誓い合い、有意義な協議会となりました。

連絡協議会の様子

パトロールの様子

衛生講話を実施

【宮崎北部森林管理署】

10月7日、日向市役所の保健師　尾﨑俊太郎氏を講師に迎え、「生活習慣病の予防について、心の健康、ストレスについて」と題し、衛生講話を実施しました。

初めに生活習慣病とは、食事や運動、喫煙、飲酒、ストレスなどが原因で起こる疾患であり、また、メトボリックシンドロームは、食べ過ぎ、飲み過ぎ、運動不足、喫煙などが影響し、その結果、血圧高値、脂質異常、高血糖を引き起こすことを理解しました。脂質異常については、血液中の脂肪やコレステロールが増えた状態でこれが続くと血液がドロドロになって動脈硬化が進行し、心筋梗塞や脳血栓を発症するリスクが増えるとのことです。予防には適度な運動とバランスの取れた規則正しい食生活、飲酒は節度ある適度な量を心がけるようにとのことでした。

後半は、心の健康に関する講話で、最初に職員全員で30項目からなるストレスチェックを実施し、自己採点して自分のストレス度を再確認しました。

ストレスがかかると、精神的（不安、緊張、過敏、抑うつ、怒り）、身体的（頭痛、肩こり、動悸、めまい）行動面（食事量の変化、飲酒、喫煙）で体が反応し、循環器、（高血圧症、狭心症など）消化器（下痢、便秘など）などの疾患を患うことから、ストレスと上手につきあい、思いっきり笑う、ぼーっとするなど気軽にできるリフレッシュ法を見つけることが必要です。

この衛生講話を通じて、職員一丸となって心と体の健康の保持増進、明るく健康な職場づくりに努めていきます。

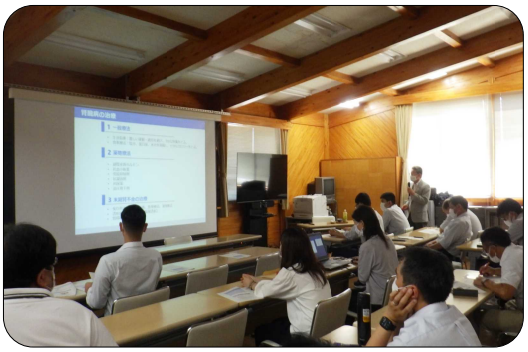
衛生講話の様子

衛生講話と安全勉強会を実施

【鹿児島森林管理署】

鹿児島森林管理署では、令和3年度の国家公務員健康週間中の行事として10月7日（木曜日）に衛生講話と安全勉強会を実施しました。当日は午前中、健康管理医である前田内科クリニックの前田忠先生から「腎臓病と透析治療の現状」というテーマにより講話を受け

ました。講話では本年度の健康診断結果で、職員に腎臓病や糖尿病の予備軍が多いこともあり、それらを踏まえた健康管理の指導を受けました。また、午後からは、食生活や運動が健康に直結していることから鹿児島市保健政策課の中村菜摘管理栄養士を講師に招き、食事と運動や鹿児島の郷土料理等についての講話を受けました。その後、こころの健康づくりに関してメンタルヘルスに関するＤＶＤを視聴し、九州局管内における交通事故・違反の現状についても学び、たいへん有意義な1日となりました。最後に今年度の標語「無理せずに、あなたの健康 最優先」を確認し、自ら健康管理等を行い業務に取り組んでいくことを誓いました。



衛生講話の様子

永年勤続表彰
勤続30年・20年

◇農林水産大臣賞
勤続30年
古村健児【計画課】
金田伸也【福岡署】
鈴木　誠【長崎署】
小園英行【熊本署】
白坂　進【大分西部署】
竹原敬一郎【大分署】
後藤　毅【宮崎北部署】
宮川貴之【宮崎北部署】
花田孝文【西都児湯署】
小糸照雄【宮崎署】
森　俊之【都城支署】
小城　守【宮崎南部署】
園田清隆【大隅署】

◇農林水産大臣賞
勤続20年
後藤直哉【西表森林生態系保全Ｃ】
岩下治喜【長崎署】
濵田祥吾【熊本署】
沖田正志【熊本南部署】
南﨑亜紀子【都城支署】

（担当＝総務課）

モニターの声

綺麗な森を次の世代に残しましょう

古田　仁司さん

私は大阪府大阪市に生まれ、中学生までは森と言えば公共プールのある服部緑地公園に出かける事、山は小学校の林間合宿で高野山や六甲山に行く程度でした。

同級生は珍しがりながらも「わらびやぜんまいなどの山菜を採りに行こう」と誘ってくれ、森の爽やかな空気などで私自身の体調も良化し、健康を取り戻すことができました。

高校生時代は山岳愛好会に入り、蔵王連峰や栗駒山などを学友と一緒に歩き回り楽しんでいました。　登山した後の温泉を楽しみ、周囲の季節に応じた景色を愛でると受験勉強のストレスや日ごろの疲れも吹っ飛んでしまいます。

大学を卒業し、東北地方から遠く離れた九州の企業で社会人生活をスタートすると、また職場の先輩が山登りが好きで、5月になるとミヤマキリシマで有名な阿蘇山、九重山、雲仙岳、霧島連山などに一緒に出かけました。特に、くじゅう連山の平治岳と大船山の見事なミヤマキリシマの群落は忘れる事が出来ません。

しかし、山登りをしていると山道にペットボトルなどの人工物が捨てられている光景を目にすることが多くあります。数年前にハワイでトレッキングに参加した際、ツアーガイドの女性が捨てられているゴミを拾い、入山する際に外来種が入り込まない様にツアー参加者の衣服を吸着ローラでチェックする気配りがある事例を思い出し、私自身も森を大切にし後世に美しさを残すべきと考えネット検索している時に国有林モニターを目にして参加することにしました。

残念ながらコロナ禍で集まっての活動は出来ていないものの森林管理局の活動を見つつ知識を少しでも蓄え、近場の山に登る際はソーシャルディスタンスを気にしながら見付けたゴミを拾い森林保護活動と健康管理を今後も努めていきます。

（福岡県北九州市在住）

1960年代から1970年代の高度経済成長期の大阪市内は光化学スモッグの発生など大気汚染の影響で私自身も体調を壊してしまいました。

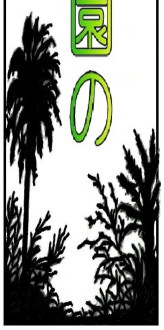
両親は私の体調を気にして、環境の良い場所へと東北地方の宮城県に引っ越しを決断しました。

森との触れ合いはこの東北の地から始まりました。

大阪弁を喋る転校生を

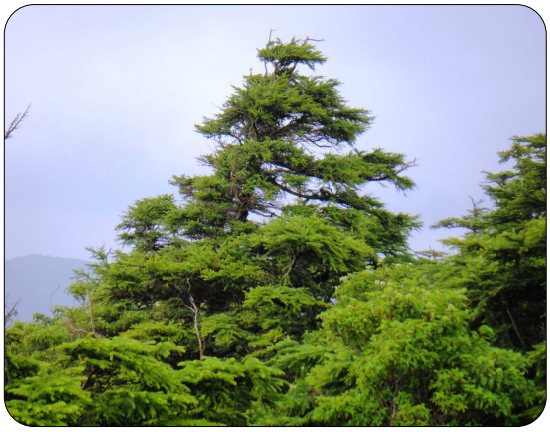
都会の中の憩いの森

監物台樹木園の多様な植物



⑯⑧ カラマツ（マツ科）

春の九重高原で牧ノ戸から登山して沓掛山を越えると左手に大面積のカラマツ造林地があり、鮮緑色の若葉に魅了されました（台風被害でその面影はなくなりましたが再生しつつあります）。また、牧ノ戸峠から九州自然遊歩道を下っていくと左手にカラマツ造林の大面積があり、春のみどり、秋の紅葉は特別な風景で、異郷に感じられました。遠い遠い昔の話です。



戦後に植えられたカラマツが伐採時期を迎えており本州から北においては、盛んに伐採されております。平成28年の統計で国産材生産量の樹種別割合は、スギが57％、ヒノキが12％、カラマツが11％、広葉樹が11％となっており、ヒノキとほぼ同じ量が生産されております。

カラマツは落葉性のマツであり、葉は針形で、白い粉に覆われた薄い緑色であり、長さは2～5㎝。秋には葉は黄色く色づき、褐色の冬芽を残して落葉します。長さ2～5㎝の新葉が芽吹いた後、伸びるさまはスギ、ヒノキしか知らない私には、まさに神秘的で新鮮さを感じていました。

カラマツは、日本原産の針葉樹の中で、唯一の落葉樹です。そのため、そのまま「落葉松」と書いて「カラマツ」と読ませています。

森林インストラクター
安楽　行雄

みどりの散歩路

最近、テレビ録画機能付きDVDプレイヤーを購入した。普段は親も子も忙しく、テレビはほとんど見ないのだが、毎週金曜日の夜は、家族みんなでだらだらとテレビを見ながら会話を弾ませている。しかし、CMが邪魔をするので同機器の購入となった。

▼購入早々、子が喜ぶようにと、親が番組表からアニメや教育番組を次々と予約し、家族の団らんに活用している。その中でも子が特に気に入っているのは、動植物のドキュメンタリー番組である。どの動植物にも、大自然の中で生きていくための生態に、驚きと魅力を感じ、親も子も夢中になってしまう。先日は、マダガスカルの固有種に大興奮だったが、タヌキなどの身近な動物でも「前にみた！」と大興奮である。

▼以前、田舎で家庭菜園に取り組んだり、鶏を飼って卵を楽しんだりしていた。菜園ではさまざまな昆虫やモグラ、ネズミ、ミミズが織りなす生態系を子も一緒になって楽しんだ。また、夜になると、鶏を狙ったタヌキやテン、ヘビが現れるので、家族みんなで闘ったりもした。

▼国有林内にも、魅力ある生態系が多々存在する。そんな親の仕事にも、子は興味があるようだ。

【ま】